

安楽寺だより

第42号

紙面内容

- 2面 疑問に答える(えんぎを担ぐ?)
 3面 春彼岸墓法要を勤める
 4面 日本仏教史(補足) 鎌倉時代③

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

第1回 お釈迦さまの誕生

お釈迦さまは、紀元前四六三年に、釈迦族の王である父・シュッドドーダナ(浄飯)



「天上天下唯我独尊」

王妃・マヤー(摩耶)の王子として誕生されました。ご誕生の逸話は「仏本行集経」などの仏伝に残されています。

七世紀にインドを訪れた中国の僧・玄奘は、「大唐西域記」に「釈尊誕生の地ルンビニーは、清らかな池と美しい花が咲き乱れるところ」と述べています。この地は、釈迦族の城(カピラヴァスツ)から東方二十数キロの所で、実家に里帰りする途中に誕生されたと伝えられています。

お釈迦さまは、生まれるとただちに七歩歩いて立ち止まり、右手を天に、左手を地に指差して『**天上天下唯我独尊**』と言われました。このことばは、「私たち一人ひとりが、他の誰とも代わることができない尊い人間として誕生してきたこと」を表わしています。「唯我独尊」を独りよがりとか独善的という意味あいで使用がありますが、決してそのようなことを意味しているのではありません。

「生まれてきてありがとう。あなたは、この世界に唯一人の人間として、かけがえない尊さを持って生まれてきたのです。ひ

とつの使命をいただいて生きていくてください」とお釈迦さまは述べられたのです。

七歩歩んだことは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道の世界から一歩踏み出す、かけがえない尊さを持って誕生したこと、の教えを表現しています。

浄飯王は、お釈迦さまを、ゴータマ(最も優れた牛)シッダールタ(目的を達成する)と、名付けました。

日本では、四月八日がお釈迦さまの誕生日とされ、毎年、灌仏会・はなまつりとして仏事が営まれています。ルンビニーになぞらえた花御堂とよばれる花で飾った小堂を境内に設け、灌仏盤という水盤に安置した「誕生仏」の像の頭上に柄杓で甘茶を注ぐ行事は、九龍が天より下って「甘露の法雨」を注ぎ、地下より蓮華がわきでて「誕生仏」の足を支えたという伝承によるものです。

仏教国のネパールやスリランカなど南アジアでは、インド歴ヴァイシャカ月(西暦の四月中旬〜五月中旬)の満月の日をお釈迦さまの誕生日としています。

疑問に答える⑤

阿弥陀さまとお釈迦さまの違いは？

浄土真宗のお仏壇のご本尊は、阿弥陀さまです。阿弥陀さまとお釈迦さまは、どう違いますか？

お釈迦さまは約二五〇〇年前に実在され、人々にほとけ様の教えを説かれた方です。『釈迦牟尼仏、王舎城および舎衛国にましまして、大衆の中にして、無量寿仏の莊嚴功徳を説きたもう』（教行信証）とあります。お釈迦さまの教えによって、無量寿仏（阿弥陀如来）のはたらきを明らかに知ることができるとのことです。

善導大師は、「二河白道のたとえ」で旅人（念仏行者）が、信心をいただくこころの有り様を述べておられます。

「お釈迦さまは東岸（この世）から『この道を尋ねて行け』と勧め

られ、阿弥陀さまは西岸（浄土）から『汝、一心に正念にして直ちに來れ』と呼び招かれます。釈迦・弥陀の声を聞くことよって信心に目覚め、迷いを離れて西岸に到れば、阿弥陀さまのすがたを見て慶喜する」と語られています。

親鸞聖人は、『往生の信心は、釈迦・弥陀の御すすめによりて起こる』と教えられています。

お釈迦さまのことを『教主』として阿弥陀さまを『教主』と申すこともあります。

毎日のお仏壇でのお参りは、私たちが信心をいただき、お念仏を申す身となる意味を持った仏事なのです。

阿弥陀さまをお莊嚴して「南無阿弥陀仏のいわれ」を聴聞しつつ、お念仏をする生活のなかで、私たちが「つねに照らし、つねに護りたもう」（大悲無倦常照我）阿弥陀さまに出遇っていくのです。

疑問に答える⑥

えんぎは担ぐものですか？

「お茶碗の茶柱が立つとえんぎ良い」といいます。また、「数珠や鼻緒が切れるとえんぎが悪い」などと申します。「えんぎを担ぐ」ことは私たちの日常生活に時々あります。本来は、どういう意味のことばですか？

えんぎは、『縁起』と書きます。私たちは、吉凶禍福の前兆にふれて、縁起の良し悪しを申すことが、しばしばあります。また、神社・仏閣の由来や歴史を表わす時、例えば「〇〇寺の縁起」と申します。縁起ということばは歴史的にもいろいろな意味合いで使われてまいりました。

縁起の本来の意味は、お釈迦さまがお説きになった仏教の教えの中でも、大切なお言葉です。『すべてのもは、何かを縁にして存在し、独立してひとり存在しているものはありません』という、仏教

の「因縁生起」の教えであります。

つまり「縁起」とは、「物事が様々なことがらやはたらきを縁として、共に関係し合いながら起こっていること」を意味しています。



例えば、お花や食べ物などの植物の種を土に蒔く、苗を植える（因）と芽が出てくるのは、土や水・太陽の光（縁）などがあるからです。あらゆる事物は、単独で存在しているのではなく、関係し合い・変化し合いながら成立しているのです。

ですから「えんぎを担ぐ」のは、お釈迦さまの教えとは違います。

縁起は、すべての事物は関係性を持って存在するという事実を語る道理（法）をあらわす言葉です。

佛佳会総会を開催



昨年三月以降、新型コロナウイルス感染拡大により、安楽寺の法要などは中止または縮小での開催に余儀なくされている現状です。佛佳会は、ご門徒様の親睦交流を図り、寺の事業等を支援する目的で平成七年に再発足し、今年で二十七年目になります。今年の総会は二月十一日、感染防止のため、安楽寺会館玄関での検温・会場の換気・消毒・マスクの着用、そして間隔を空けての座席などの対策をして開催しました。三〇名の皆様にご出席頂きました。

総代の早川様の司会で開会し、全員で真宗宗歌を唱和した後、総代の市川様に経過報告

をお願いしました。「毎年実施しております親睦旅行は、昨年はコロナ禍で中止致しました。今年は感染状況の推移を考慮し、秋には実施したいと思っております」続いて総代の吉田様から会計報告がございました。「開設から二十三年になります」安楽寺会館の設備修復などに会の会計より支出させていただきました。今日現在一六二名の方にご入会頂いております」

その後、市川様から会計監査報告があり、全員の拍手でご承認いただきました。最後に恩徳讃を斉唱して総会を終了しました。

ご門徒の皆様、ぜひご入会をお願いしたいと思います。詳細は、安楽寺までご連絡下さい。

春彼岸墓法要勤める

三月十九日、八事霊園安楽寺墓地で春の彼岸墓法要をお勤めしました。穏やかな日差しの中、早朝より多くの皆様にお参りいただきました。

昨年のお彼岸は、あちこちで新型コロナウイルスの感染が拡大する時期でしたので、例年より少ないご参拝でしたが、今年は七十名を越す皆様にご参拝されました。

午前十時三十分から永代供養墓の前でお勤めす



八事霊園永代供養墓

る中、彼岸に往生された亡き方々を偲び、今ここに生かされているわが身を振り返りながら、皆様に焼香していただきました。

お墓の法要の様子をオンラインで同時中継致しました安楽寺会館には、例年以上の二十五名の皆様にお出かけいただき、お焼香をしていただきました。ご参拝誠にありがとうございました。



仏教豆知識

第四十二回



日本仏教史

補足⑥鎌倉時代

平安時代から、ひろく行なわれていた「法華信仰」は、鎌倉時代になり、日蓮によって一宗として誕生しました。日蓮（一二二二〜一二八二年）は、安房国（現在の千葉県）で誕生し、十六歳に清澄寺で出家しました。

寛元元年（一二四三年）二十二歳の時、比叡山定光院で修行しましたが、当時の天台教学が密教化していることに不満を感じて、十年後に清澄寺に帰りました。

そして、法華経こそ釈尊の真実の教えであり、「専修唱題」を説き、日蓮宗を開創しました。

文応元年（一二六〇年）日蓮は、「立正安国論」を著述して、当時隆盛してきた念仏宗や禅宗を批判し、鎌倉幕府に題目の必要性を進言しました。しかし、幕府は取り合わず、逆に伊豆国（現在の静岡県）や佐渡国

（現在の（新潟県）となりました。日蓮の宗教活動の一つには、時の権力への働きかけ（国家諫暁）があります。法華経によって社会を改革し、法華信仰によって国家を統治して、現実の日本に真実の世界（仏国土）を建設しようとしてきました。このような信念を持って生涯を尽しました。



日蓮

ご門徒の皆様へご案内

若院（吉田昌史）が、来たる四月十五日（木）名古屋別院にて定例法話を勤めることになりました。時間のご都合がつかまりましたら、東別院対面所（本堂東隣の御堂）にご参拝いただければ幸いです。

午前法話は十一時一〇分〜四〇分
午後法話は一時〜一時三〇分
よろしくお願ひ申し上げます

今年のソメイヨシノの開花は、お彼岸入りの三月十七日でした。三月中には満開になるようです。暖かくなるのは有難いですが、季節感が少しずつ変化する時代を迎えているように感じます。

▼人間の営む日常生活や企業が行なう経済活動で排出される温室効果ガスが、地球温暖化の大きな要因になっています。これらの人間活動により気候変動が引き起こされ、生態系が危機的状况になりつつあります。▼人間世界では、経済発展による生活向上というプラス効果と同時に自然環境の破壊というマイナス面を常に意識すべき時代だと思えます。▼人間には、二酸化炭素排出削減の脱炭素社会、カーボンニュートラル（温室効果ガスの増加が実質的ゼロの状態）の社会にすべき責務があると思えます。「自然との共生」といわれますが、人間が開発などによって他の動物や植物に生存の危機を与えている自覚を決して忘れてはいけません。